

# ヤスパース『形而上学』における「暗号」思想\*

Der Gedanke um “Chiffre” in Jaspers’ *Metaphysik*

布施 圭 司\*\*

Keiji FUSE

## 概 要

ヤスパースは、「実存」(Existenz)に対する「超越者」(Transzendenz)の現れを「暗号」(Chiffre, Chiffer)と呼ぶ。経験的な自己存在にとっては世界内の事物は概念的に規定され対象的に把握されるのに対して、本来的な自己存在である実存にとっては世界内の事物は超越者の現象という意味をもつという。「暗号」という用語は、とっつきにくく神秘的な印象があるが、われわれは「今—ここにある物事の代替されない絶対的現実」として暗号を捉えることにしたい。可能性なき「絶対的現実」(absolute Wirklichkeit)として超越者は現象するとされおり、また暗号は他のものによってその意味を解釈されず、そのものとして受け取るしかないとされている。超越者そのものがいかなるものであるかについて、ヤスパースは語っていない。むしろ超越者は直接的には経験の対象となることはなく、思惟不可能であることが繰り返し強調されている。しかしそれだけではなく、暗号という形で具体的に現象し、積極的な作用するあり様が検討される点に、超越者を単に世界から隔絶したものとせず、世界の中に具体的に顕現するものとして見て取ろうとするヤスパースの意図がある。本稿では、ヤスパースの最初の主著である『哲学』*Philosophie*を取り上げ、その構成に触れつつ、第三卷『形而上学』*Metaphysik*で叙述される暗号思想を検討し、その特徴や、ヤスパースの実存思想における意義を検討したい。

### 1 はじめに

ヤスパースは、「実存」(Existenz)に対する「超越者」(Transzendenz)の現れを「暗号」(Chiffre, Chiffer)と呼ぶ。経験的な自己存在にとっては世界内の事物は概念的に規定され対象的に把握されるのに対して、本来的な自己存在である実存にとっては世界内の事物は超越者の現象という意味をもつという。「暗号」という聞き慣れない独特な用語は、とっつきにくく神秘的な印象があるが、われわれは「今—ここにある物事の代替されない絶対的現実」として暗号を捉えることにしたい。<sup>①</sup>可能性なき「絶対的現実」として超越者は出会われるとされおり、また暗号は解釈されえない、つまり他のものによってその意味を説明されず、そのものとして受け取るしかないとされているのであるから、暗号をその様に考え

ることは適当と思われる。

超越者そのものがいかなるものであるかについて、ヤスパースは語っていない。むしろ超越者は直接的には経験の対象となることはなく、思惟不可能であることが繰り返し強調されている。概念的には、超越者は実存の自由の贈与者、「包越者の包越者」(das Umgreifende alles Umgreifenden)、「一なる包越者」などと言われている。

「神」、「神性」と呼ばれる場合もあるが、「隠れた神」とされている。単に「存在」と呼ばれる場合もあれば、すべてのものを包含する「一者」(das Eine)と呼ばれたり、局所的・限定的な現実ではない「絶対的現実性」「本来的現実性」と呼ばれる場合もある。思惟されない「無」とも呼ばれる。

ヤスパースは、超越者を思惟できない、直接把握できないとするだけでなく、暗号という形で超越者が具体的に現象し、積極的に作用する面を捉えようとしている。超越者を単に世界から隔絶したものとせず、世界の中に具体的に顕現するものとして見て取ろうとするヤスパース

\* 原稿受理 平成23年10月3日

\*\* 一般科目

スの意図が感じられる。

暗号論は、まず『哲学』*philosophie* (1932) において展開されており、基本的な概念はその後も変更がないと思われるが、思想の構成の中での位置づけは変化が見られる。『真理について』*Von der Wahrheit* (1947) では暗号の規定は『哲学』と同様のことが述べられているが、具体的な暗号の例についてはほとんど論じられていない。そして『真理について』では「統一への意志」「交わりへの意志」としての理性が哲学の手段とされたことに伴い、あらゆるものの統一という観点から暗号が語られている。『哲学的信仰』*Der philosophische Glaube* (1948) においては「哲学的信仰」の概念の論述が主で、暗号は中心的な主題ではないが、『啓示に面しての哲学的信仰』*Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung* (1962) において再び暗号は詳細に論じられる。『啓示に面しての哲学的信仰』では暗号の規定としては変更がないものの、啓示信仰の具象性と暗号の対照が見られることなどの変化がみられる。

暗号という用語の由来については、ヤスパース自身語っていないので、定かではない。「暗号」という言葉は、ドイツ・ロマン派にある。またカントの『第三批判』にも見られる。<sup>2)</sup> カントの場合自然美のみが暗号と呼ばれており、また詳論されている訳ではないが、ヤスパースの場合「暗号でありえないものはない」とされており、また実存に対する超越者の現象の主要な論点であるから、ヤスパースの暗号概念はカントから着想を得た可能性がある、と言えるのみであろう。ただ、『哲学』はごく簡単に見た場合、第一巻『哲学的世界定位』は経験的認識の問題を扱い、第二巻『実存開明』は自由を中心とする人間の実践の問題を扱い、第三巻『形而上学』は超越者の現れを扱うという構成だが、この構成は、カントの三批判書を想起させる。また『第三批判』は「判断力」(Urteilkraft) が主題であり、しかも美的判断と道徳的判断との類似が説かれており、ヤスパースにおける暗号は「想像力」(Phantasie) により受容され、しかも実存開明を前提とすることを想起すれば、思想の構成としては重なるものがあることは興味深い。

## 2 『形而上学』の構成

### (1) 世界存在、実存から超越者へ

『哲学』は、第一巻『哲学的世界定位』、第二巻『実存開明』、第三巻『形而上学』という構成になっている。

「世界存在から、それを突破して私は可能的実存としての私自身へと来る。私はこの可能的実存において自由として在り、そして交わりにおいて他の人々の自由へと

心を向けている。(中略)しかしこの存在もまた、それによってすべてが汲みつくされうるだろうところの存在ではない。実存は、自由の他の存在と共にまたそれによって存在するのみならず、それ自身或る存在に関係しているのであり、この存在は実存ではなくてこれの超越者なのである」(Jaspers1932III:2)。

『哲学的世界定位』においては、経験可能な内在的世界における実存による存在の探求が検討され、世界内で対象的に経験される事物の諸限界が示される。対象的事物はそのつどのパースペクティブによって整理され、概念的な規定により把握されるものであり、存在そのものではない。『実存開明』では、内在的事物を超越した実存のあり様が、限界状況、自由、交わり、歴史性などといった諸相のもとに検討される。それにより、実存の内在者からの自立性、自由としての実存が明らかになったが、同時に実存が自らは存在そのものではなく、他のものすなわち超越者に根拠があることが明らかとなる。そして『形而上学』において実存の拠り所であり、存在そのものである超越者について論究される。

### (2) 可能性なき現実性としての超越者

『実存開明』においては、内在者を超越した実存のあり様が「自由」とされたのだが、自由は可能なものの中を、恣意として働く。可能性に止まる時、実存はまだ内在的な概念による規定に拘束されており、根拠に基づいているとは言えない。可能性のない現実性に面するとき、従って、自由自身を止揚する時、実存は充足する。

「従って自由はなるほど世界現存在を突破する際に、自由において存在をこれから決定するという情熱を以て捕捉されるが、しかし自由はそれ自身を最終的なものと見なすことはできない。何故ならば自由は単に時間の中で、尚も可能的な実存が自己を実現する途上に在るにすぎないからである。それは即自的存在ではない。超越者においては自由は終止する、というのは、もはや決断されるということがないからである。そこには自由も不自由もないのである」(Jaspers1932III:5)。

「こうして私が可能性へ変転することのない現実に突き当たる所で私は超越者に出くわすのである」(Jaspers1932III:9) とされる。この引用にある「可能性に変転することのない現実性」ということは分かりづらいが、唯一の「このもの」と解するべきであろう。世界内の物事は、普遍的な概念で理解されるが、普遍的な概念は他のものとも共通する規定であり、それでありうるという可能性として事物にいわばレッテルづけされる。その規定に応じてわれわれは物事を操作しようとする。

その規定は条件が変れば、ふさわしくなくなり、いわば物事からはがされる。その普遍的な概念による規定は、物事そのもの規定ではなかったのである。普遍的な概念によらず、物事そのものに対する時、物事は代替不可能な個物として受け取られる。そのときわれわれは「今—ここにある物事の代替されない絶対的現実」に直面していると言え、その物事は存在の顕現であり、超越者の現れである、とヤスパーズは主張していると考えられる。

『哲学的世界定位』において、『哲学』の構成を予告している箇所では『形而上学』の内容について、暗号は「絶対的対象性」(absolute Gegenständlichkeit)として実存の意識を満たす(erfüllen)、とある(Jaspers1932 I:33)ことは、絶対的現実性としての超越者のことを述べたものであろう。

### (3) 『形而上学』の構成

『形而上学』では、「形式的超越」「超越者への実存的連繫」「暗号解説」という三つの側面から、実存と超越者の関係を論じている。

「超越者の探求は、超越への諸々の実存的連繫の中に在り、超越者の顕在は暗号文字の中に在る。両者のための空間をあけておくのが形式的超越である。しかし哲学することにおいては、形式的な思惟の諸経験も暗号文字の解説も、それらの重みを実存開明からして初めて受け取るのである。実存に根づくことなしには、それは気儘な無際限へと陥るであろう」(Jaspers1932III:35)。

実存が世界の中で統一を志向したり、閉鎖的な秩序を打破したり、実践的に超越者へ関わるのが、実存的連繫である。暗号は「瞑想的」な関わりであるとされる。直観や思弁による超越者の観想といってよいであろう。そして対象的思惟にとって超越者は矛盾・循環・同語反覆として現れ、思惟可能でないものが存在するということが感得される、ということが形式的超越である。形式的超越によって、内在者に止まらない超越者の存在が是認され、実存的連繫や暗号が可能になる。そしてまた、形式的超越、実存的連繫、暗号のいずれも、実存が自覚化されていることが、真正さの条件である。

## 3 暗号の規定と暗号の三つの種類

### (1) 暗号の規定

「形而上学的対象性は暗号と称する、というのは、それがそれ自体としては超越者ではなくて、超越者の言語だからである。超越者の言語としてあるから意識一般によっては理解されず、或いはまた聞かれさえしないで、かえってこの言語の性質と、それが話しかける仕方とは

可能的実存にとってのものである」(Jaspers1932 III:129)。

意識一般は、物事を普遍的な概念で捉え、暗号を超越者の現れとして捉えることはない。暗号という現象は、実存の自由の自覚が前提となる。実存が内在者においては自らの導きや根拠がないことを認め、自由としての自らのあり様を自覚するとき、自由の贈与者として超越者を想定し、自由の実現の場、さらに自由の意義の告知という意味を内在的世界がもつようになる。そうすると、内在者は超越者の現れということになる。暗号は「言語」であるから、超越者そのものではなく、超越者がそれにより顕現する媒体という意味をもつ。ただし後(4 暗号の諸特徴)で見ると、その媒体と別に現れるものがあるという、通常の媒体とは異なる。

### (2) 三つの言語

ヤスパーズによれば、暗号は、第一言語、第二言語、第三言語という三つの種類があるという。この三種類の相違や相互関係については、明確とは言えないので、検討しよう。

第一言語については次のように述べられている。

「存在については現存在の諸々の暗号において経験されるべきである。現実が初めて超越者を啓示するのである。超越者については普遍的なものの中では知られない。それはただ歴史的に現実の中から聞かれるべきである。経験は、経験的知識の源泉であると同様に、また超越者の確認の源泉である」(Jaspers1932III:130)。

「この経験にあつて私は深淵の前に立っている。経験が単なる現存在的経験を出ない時、私は慰めの無い欠乏を経験する。その形而上学的経験の中には、それが透明(transparent)に成り、そしてこれによって暗号と化する時、充実する現在(erfüllende Gegenwart)が存するのである」(Jaspers1932III:130)。

この二つの引用によれば、経験は普遍的概念で捉えられるとき経験的知識を与えるが、同じ経験が形而上学的経験すなわち超越者の暗号にもなるという。二番目の引用にある「透明」になるという表現もヤスパーズは多用しているが、分かりづらいことは否めない。ただ前の引用と併せ読むとき、通常の内在的な経験において普遍的な概念の形で理解される物事は不透明ということになる。「今—ここにある物事の代替されない絶対的現実」においては、物事は透明であるということになる。その意味は、物事が本来の由来である超越者との繋がりにおいて受け取られるということと解することができるのではないか。その繋がりを感知しつつ物事に面することで、

普遍的概念によっては与えられない充実が生じ、物事のもとに真に存在すると言えるのである。

「この形而上学的経験は第一言語の解説である。これを解説するということは了解というものではなく、基礎存在者の開示でもなくて、現実的に自身その許にあるということである。合理的な確認ではなくて、これを越えて彼方の、現存在における存在の透視性であるが、この透視性は、実存の最も幼稚な直接性に始まり、そして思惟によって最高度に媒介されてもしかこの思惟〔そのもの〕ではなく、かえてこの思惟を通して或る新たな直接性なのである」(Jaspers1932III:130)。

この引用にある「現実的に」「その許にある」ということは、今まで出てきたことと同じであろう。さらに「直接性」という規定が与えられている。普遍的概念による把握は、物事を概念という媒介によって受け取っているため「間接的」と言える。幼稚な思惟の契機が弱い直接性は、思惟の媒介が少ないあるいはないため、直接物事のもとにあり、また思惟により普遍的概念を越えて真にその物事に臨むとき、直接物事のもとにあることになるだろう。自然や社会的状況等が、素朴に経験され場合でも、あるいは思惟により反省を経る場合でも、まさに自己にとって代替不可能な現実として受け取られるとき、それは存在そのものの現象以外ではないと言えよう。先の箇所でも可能性なき現実性が超越者の顕現とされていた。

そのように解するなら、次の引用の意味はより分かりやすくなると言えよう。

「私は可能性を止揚しながら、現実的なものに衝き当たろうとする。諸可能性に満たされながら私は現実へと歩み、自分からして個別的(einzeln)にまた局限的(begrenzt)に成って行く、というのは、私はあの、もはや可能性が無くて、決定的に現実的なもの—これは、存在以外の何ものでもない故にこそ正に存在するものなのだが—が存する所へ至ろうとするからである。この存在は時間的現存在の中では私に決してそれ自らは出会うことがない。しかしその暗号を解説することは、他のすべての所業(Tun)と経験との意味に成る」(Jaspers1932III:131)。

普遍的な概念で表わされる意味は他の物事とも共通する規定であり、そのようでありうるという可能性であるが、それは今—ここにある物事そのものを表わしてはいない。むしろそれらの規定では不十分であるとし、物事の真の個別的なあり方を探求してゆくなら、物事を可能性なき現実として受け取るしかない局面へと至るであろう。その現実を受け取ることは、根本的な物事との交渉

である。実存にとっては、そこから普遍的な概念の世界である内在的世界が意味を与えられるのである。

また次の引用の意味も「今—ここにある物事の代替されない絶対的現実」という点から理解することができよう。

「超越者の経験は、それが普遍的になればなるだけ色あせた(blaß)ものになり、反対にそれが、今—ここでのみ充実される或るものの頂上に登れば登るだけ確かな(entschieden)ものになる。例えば自然の経験は、全く個体的なもの(das ganz Individuelle)の判然性(Deutlichkeit)の増大につれて—私が、或る世界の全体が顕在(Gegenwart 現在)する中で最も微細な(kleinst)現実の最も具体的な知識を獲得する時に—暗号文字の解説へと変わるのである」(Jaspers1932III:131)。

われわれが事物を普遍的な概念で理解する場合、超越者から遠くなる。むしろ「今—ここで」「充実」されるものに直面するとき、超越者に近づく。「充実」という用語もヤスパーズは多用するが、今まで見てきたことを踏まえるなら、可能性なき現実にあること、現実そのものに全面的に相対すること、今—この現実のただ中にあること、さらに言えば現実と一体化すること、解してよいのではないか。自然の経験では、概念的な抽象的理解ではなく、「最も微細な現実の最も具体的な知識」において超越者は顕現するのである。

第二言語は、第一言語が神話や伝承の中で伝達される形になったものとされる。「ただ瞬間的な顕在の直接性においてのみ聴き取れる超越者の言語の反響(Widerhall)の中で、形象や思想としての諸言語が創られ、これらの言語は、[超越者の言語として]聴かれたものを伝達することになる。存在の言語に人間の言語が並ぶのである」(Jaspers1932III:131f)。

「瞬間」もヤスパーズが多用する表現であるが、ここでは概念的な通常の把握が尽きる時、物事の真の個別性、「このもの」としか言えない、いわば「このもの性」、が受け取られるが、それは一瞬のことで、われわれはすぐに概念的な理解に戻るという事態があるため、瞬間的に顕在するということが解してよいと思われる。そのような根本的な第一言語の経験が、伝達される形象や思想として表現されるようになったものが、第二言語である。

「子供は第二言語を媒体として、超越者の存在を疑問の無い現実として経験しうる」(Jaspers1932III:139)とされるように、子供は神話を純粋に信じ、その中で超越者を経験する。根本的な経験は、第一言語であるが、第二言語は、世代の連続性や社会性をも

った観念を与える。第二言語により、われわれは現実を捉え、現実へと関わる仕方を学ぶのである。しかし、成長するに従い、様々なパースペクティブや思想を学び、純粋に神話を受け取らなくなる。

第三言語については、次のように述べられている。

「思想が暗号文字を自らに解読する時、それは明らかに、他者としての超越者を認識することも、また現存在としての現存在に関する知としての世界定位を拡張することもできない。とはいえ思想は、それ固有の形式法則に聴従しながら、必ず諸々の対象性によって思惟するのである。思想は根源的な暗号文字を、一つの新しいそれを書くことによって解読する。一思想は、それにとって直観的ならびに論理的に顕現している世界現存在との類比に従って超越者を思惟するのである。思惟されたものはそれ自体にはただ、今や伝達可能に成った一つの言語としての象徴であるにすぎない。この言語は様々な仕方であらう」(Jaspers1932III:134)。

思惟により超越者を把握しようとするのが第三言語である。超越者や神に関する様々ないわゆる形而上学的思想がそれであろう。形而上学的思想は、自己の体験や神話や過去の形而上学的思想から超越者の現れを受け取り、自らもまた超越者について記すことにより、新たな暗号文字を書くのである。第三言語は思索者にとってのそのつどの超越者の現れと言えが、どれもが超越者そのものを捉える訳ではなく、「そのどれもが他と同じ仕方では暗号として存在に的中せず、どれ一つ本来的かつ完全に的中するものは無いのである」(Jaspers1932III:136)。

さて三つの言語の相互関係はいかなるものであろうか。

「反省の大いなる危機の後では、第二言語の—いろいろな神話の、また啓示の—諸々の暗号の、以前のあの現実には、もはや同一的に〔あるものとして〕は引き返し獲得されえない」(Jaspers1932III:140) という叙述を手がかりにしよう。

疑問なく神話や啓示の第二言語が受け取られている状態では、神話や啓示は可能性のない現実として受け取られる。しかし思惟による反省が加わると、神話や啓示は疑問にさらされる。いろいろな神話は互いに矛盾する内容を含んでおり、互いに衝突し、正しいものとして受け取ることが困難となる。近代の合理的思惟の勃興により神話に対する懐疑が高まったことを想起されるであろう。

「保存された諸内容は過去の諸形態において語るが、しかしもっと色褪せており、もはやあの完成した、それ自ら現実と化した顕在においてではないのである」(Jaspers1932III:140) という状態になる。

これらのことを顧慮するならば、本来は第一言語が本

来的に直接的なものとして優位をもっている。しかし人間は自己の体験のみならず、共同体における伝承により生育するものであるから、第二言語は共同体における生にとって決定的な意味をもっている。しかしながら、合理的な反省にとっては、第二言語の内容は疑わしいものである。そのときに思惟により超越者に迫ろうとする第三言語が重要になると言えよう。

#### 4 暗号の諸特徴

##### (1) 内在的超越者・逆説的 - 弁証法的性格

経験的事物が実存にとっては暗号であるという主張は、内在的なものが超越的なものを現わすという悟性的には理解しがたい困難がある。「存在はわれわれにとって、それが現存在において言語と化する限りにおいて在る。単なる彼岸の如きは空虚 (leer) であって、あたかも無きに等しいのである。従って本来的存在の経験の可能性は内在的超越者 (immanente Transzendenz) を要求する」(Jaspers1932III:136) と述べられている。この「内在的超越者」について検討しよう。

「しかしこの内在者 (Immanenz) は一つの明らかに逆説的な性格をもっている。内在的であるのは、正に超越的なもの (das Transzendente) からの区別において、意識一般にあって、各人にとって一致して経験可能なもの、世界である。(中略) に向かって関係するところのものとして存するのである。しかし超越者の存在が実存に顕現する時には、それはそれ自体としてではなくて—何故ならば実存と超越者との同一性は存立しないから—、暗号としてであり、そしてまた、この対象である対象としてではなくて、いわばあらゆる対象性を横切って (quer) なのである。内在的超越者は、直ちに再び消失した内在であり、それは、現存在において暗号としての言語と成った超越者である。意識一般において実験が主観と客観との間の仲介者 (der Mittler) であるように、暗号は実存と超越者との間の仲介者なのである」(Jaspers1932III:136f)。

経験的世界は意識一般にとって明確に規定される内在である。また、実存は自らにとって、超越者そのものではないという区別がありつつ、自覚される。事物が暗号として受け取られるとき、直面する対象そのものではないがそこに現われているという形をとる。対象性を「横切って」(quer) という表現は分かりづらいが、通常の対象的認識における概念の世界の秩序とは別に顕現するというので解しておきたい。事物を概念によって秩序づけ、概念同士の関係で成立している世界の中に、実存の自由の根拠という別の根源として顕現したと言えない

であろうか。『実存開明』にあるように、超越者は実存の自由の根拠と繰り返されており、実存の自由は内在的世界の中で現実化するものの、内在的秩序に由来するのではないことから、ここではそのように理解しておくことにする。

「超越者と内在者とが相互の端的な他者として思惟された後に、もし超越者が沈み込ん（*versinken*）ではないものならば、それらはむしろ、暗号において内在的超越者として、われわれにとってはそれらの現在する弁証法と成らざるをえないのである」（Jaspers1932 III:137）。

「沈み込む」（*versinken*）という表現は分かりづらいが、内在者が対象として現前と目の前にあるのに対して、超越者は直接対象となることはないため、不可知とされたり、内在者に比して夢想的なものとされ否定されたりして、われわれから遠ざかり、関わりがなくなってゆくこと、解しておこう。例えば、神話は近代の合理的思考では、社会学的・心理学的な対象的分析の対象であり、近代人にとっては超越者の現れという意義は神話の記述の中に見て取ることは難しくなり、超越者は記述から浮かび上がって来ることはなくなり、「沈み込ん」でゆく。

従って、超越者は何らかの形で内在者のうちに現象せねばならないが、そのためには内在性と超越性を併せ持つ機構が必要である。暗号が、その役割を果たすものであるならば、暗号は内在性と超越性を弁証法的に統合したものである。超越者は暗号において、内在的であることを打ち消しつつ、同時に超越的なものに止まることなく、顕現する。

## (2) 解釈不能性

「暗号がそのつど或る世界存在と超越者との統一である時、もし暗号が或る他者を表徴するものと考えられるならば、それは終熄する。暗号文字においては、象徴と象徴されるものとの分離は不可能である。暗号文字は超越者をその顕在へもたらすが、しかしそれは解釈可能（*deutbar*）ではない。私が解釈しようとするれば、せっかく一緒にあるものを、私はわざわざ分離せねばならぬだろう。—私は暗号を超越者と、私に対しては、もともとただ暗号においてのみ現われるが、暗号ではないところの超越者と、比較対照することになる。そうすることは、暗号文字の解読から、純粋に内在的な諸々の象徴関係の把握への逸脱であろう」（Jaspers1932 III:141）。

通常の象徴や記号は、例えば鳩は平和の象徴であると言われたり、音符が音を表したりするが、共通するのは表すものと表わされるものが異なることである。特別な

象徴や記号のみならず、われわれの通常の対象的认识は、物事を普遍的な概念によって解釈するものであり、その当の物事そのものを純粋に捉えていない。また、普遍的な概念は他のものにも適用できるものである。「今—ここにある物事の代替されない絶対的現実」としての暗号は、唯一的な代替しえない意味をもっている。

そしてその意義とは、暗号はまさにそこに超越者が現れており、観る者にとってそれなしには超越者は存在しないということであろう。暗号の場合、徴表と意義が分離していないということであろう。

「観想可能な（*schaubar*）象徴性は最終的なもの（*Letztes*）を識らない。この象徴性には一種の公明性（*Offenbarkeit*）が顕現しており、この公明性は、たしかにかなり深い充実（*Erfüllung*）を識っているものであるが、しかしそれがよって以て理解されるところのいかなる他者をも識らないものである。この象徴性は、あの既に平生から周知の存在—それがこれの現象であるような—と最初から中心を定めてはいないで、それ自らの公明性の内に留まっており、この公明性は顕在的な瞬間に向かって開かれるものであるが、同時に底知れぬ深さをもっており、この深みからしてあの不確定的な存在が、ただその象徴性そのものを通してのみ輝き出るのである」（Jaspers1932 III:147）。

暗号には究極的に確定できる意義はない。実存はそこに存在の意義を見出すのだが、普遍妥当的に確定できる概念ではその意義を表すことはできない。逆に言えば、無限の意義が生じてくるような物事が暗号であるとも言える。この引用に述べられている「公明性」（*Offenbarkeit*）とは、実存が普遍的な概念による理解を脱して、物事に真に直面し、存在へと開かれることであり、「充実」（*Erfüllung*）とは、暗号が実存にとって生の導きとなり他の意義をそこから与える源泉となるということと考えられる。

## (3) 多義性

「あらゆる暗号の無限な多義性（*Vieldeutigkeit*）は、時間的現存在にあってはそれらの本質として示現する。他の暗号による暗号の解釈—思弁的暗号による直観的暗号の解釈、生成された暗号による現実的暗号の解釈—は、そこにおいて実存がその超越者を確認し、また準備的に諸可能性を自分のために創り出したく思うところの媒介物としての、いかなる終端をも有しない。諸々の暗号の一体系は不可能である」（Jaspers1932 III:150）。

暗号は、そこからわれわれが生の意義を受け取るようなものであり、世界内の事物や行為の意味がそこから理

解されるような、無限の源泉である。何かの意義に限定された場合、暗号としての性格を失う。そのため、暗号の語る意味は、対象的な認識にとっては常に多義的であり、確定されない。

また、ある暗号は実存にとって受け取られ、実存はそれを解釈して（もちろん内在的解釈ではない）、別の暗号を作り出すが、その解釈も無限の内容・様態がありうる。従って、暗号全体を一つの体系に秩序づけることは不可能である。実存は、暗号に接して、別の暗号を書く、という形で関わる。それは一つの内容・形態に固定されるものでなく、常に運動しており、開かれている。

「存在論 (Ontologie) は、本来的存在を存在に関する知識へと固定化する (Verfestigung) 道であり、これに反して暗号文字の解釈は、浮動 (Schweben) における存在の経験である」(Jaspers1932III:161) と述べられる場合の、「浮動」も同じことであろう。存在論は知として存在の種類や構造を把握しようとする。存在論は普遍的概念により、存在を固定化する。それに対して、暗号は、普遍的概念から浮動し、またさらに、暗号を解説するという自体も開かれており浮動している。

#### (4) 暗号と実存の一体化

暗号は、表すものと表わされるものが一体化していたが、さらに暗号と解説する実存も一体化する。

「暗号の中に私は滞留する (verweilen とどまる)。私は暗号を認識しないで、かえって私はその中へ沈潜する (sich vertiefen) のである。暗号の真実性のすべては、具体的な、そのつど歴史的に充実する直観の中に在る。自然の中でこの存在が私に顕われるのは、ただ私ができるもの決して一般化されえない親密さとして私に向かって話しかけさせる時だけである」(Jaspers1932 III:153)。

全面的に暗号に参加するとき、実存の行為の意味、さらに生の意義は、暗号の中に見い出される。「滞留」(verweilen)、「沈潜」(sich vertiefen) と言われた事態は、暗号解釈は、暗号のそとに実存が立って暗号を解釈するようなものではなく、暗号のただ中に実存が入り込むような関係であることを示していると言えよう。主観が普遍的概念によって対象を認識する場合、主観はいわば外から対象を眺め、主観と認識は別のものである。暗号の場合、もはや暗号は主観と別のものではなく、主観は暗号の中に包含される。また逆に言えば、主観がそこへと入り込んでいくような、大きな意義を暗号は蔵している。その意義は、誰にとっても妥当するような普

遍的なものでもありえず、自己にとって決定的な意味があるもの、あるいは自己にしか理解できないような物事の意義であろう。

#### (5) 全体へのつながり、全体の観想

「暗号解釈は元来、個々の (einzeln) 現実のもとに存する。とはいえ世界知が可知的なもの或る百科全書的な (enzyklopädisch) おさむたい統一へとおし進むのに比べて、暗号解釈はあらゆる現実的なものの直接性の全体へとおし進むのである。それは諸々の特殊な現実に孤立したまま留まることを望まないで、すべての現実に向かって公開的に、その歴史的に入って行けるようになった世界の全体において或る直接的な超越する意識を獲得しようとする」(Jaspers1932III:171f)。

何らかの物事が、圧倒的な存在感をもってわれわれに現れ、その中に引き寄せられるように思われても、その存在感に何か看過されるものを感じれば、われわれは絶対的現実とは受け取らないであろう。存在の現象であるならば、全体を表し、また全体へと広がるものでなければならぬであろう。暗号は、対象的にみれば目の前の限定された物事であるが、その根底に全体への広がりがある観想されねばならない。というより、暗号でありえないものはない、というヤスパーズという言葉に従えば、あらゆるものはその根底に全体とのつながりを有し、それが観想されたとき暗号になると言えるだろう。そのつながりは形象化されると限定され局所的なものとなるため、暗号を形象化することは欺瞞である。

#### (6) 奇跡 (Wunder) としての絶対的歴史性

「暗号として現実には奇跡であり、即ち今ここで生起するものである、というのは、このものが普遍的なものへ解消しうるものではなく、それでもなお、それが超越する実存に対して存在を現存在において啓示する故に決定的な重要性をもつからなのである。従ってあらゆる現存在が、それが私にとって暗号に成る限りにおいて、奇跡である」(Jaspers1932III:172)。

「奇跡」という表現は大げさのように感じられるが、「今—ここにある物事の代替されない絶対的現実」は、歴史的に唯一のものであるという絶対的歴史性をもつことを指していると言えよう。通常、歴史性とはその時代に応じたあり様という意味であり、他の時代では別の形態で同じ内容のものがある、ということになる。暗号は、超越者を表すという意味では、すべての暗号が共通した特徴をもつと言えるが、そのつどそれぞれが別であるということを含んでいる。

奇跡は超自然的な出来事であり、自然法則に則って理解することはできないものと一般的には理解される。因果的に生起が確定できるもののみを理解する悟性にとつては、奇跡を認めることできない。しかし、「直接的・歴史的に現実的なもの」である暗号という奇跡は、単に反自然法則的なのではない。先に見たように暗号は、実存の生を担う全体的な手引きを与えるのであり、無限を感じさせる。その意味の全体は、悟性にとっては無際限性（*Endlosigkeit*）なため、普遍的な概念によって包摂することはできない。暗号という奇跡は、自然法則を含みつつそれを越えている、ということになる。

## 5 おわりに

われわれは、「今—ここにある物事の代替されない絶対的現実」として暗号を考察してきた。単なる対象的存在に囚われるのではなく、また逆に非現実的な超越の世界を夢想するのでもなく、現実のただ中において、存在の現象に真に直面する可能性が、暗号という形で追究されたものと思われる。

さらなる問題としては、暗号間の衝突の問題がある。われわれの論究でも、第一言語、第二言語、第三言語の間には緊張があることが見てとれた。また暗号の内容に着目した場合、それらが矛盾なく調和している訳ではない。『啓示に面しての哲学的信仰』では諸暗号の「闘争」がより明確に語られるようになる。

従って、暗号解釈は諸暗号の不調和、衝突という問題にぶつからざるをえない。この問題の検討は今後の課題としたい。

### 主要文献

(引用文中の下線は原文がイタリックであることを示す。また訳出は基本的に示してある邦訳に従ったが、筆者の考えで訳した箇所もある。)

Jaspers1932 I : Jaspers,K.,*Philosophie bd. I : Philosophische Weltorientierung*,Springer,Berlin-Heidelberg-New York. (武藤光朗訳『哲学』第一巻『哲学的世界定位』、創文社)

Jaspers1932 II : Jaspers,K.,*Philosophie bd. II : Existenzzerhellung*,Springer,Berlin-Heidelberg-New York. (草薙正夫・信太正三訳『哲学』第二巻『実存開明』、創文社)

Jaspers1932 III : Jaspers,K.,*Philosophie bd. III : Metaphysik*,Springer,Berlin-Heidelberg-New York. (鈴木三郎訳『哲学』第三巻『形而上学』、創文社)

Jaspers1935 : Jaspers,K.,*Vernunft und Existenz*,Neuauflage,Piper,München. (草薙正夫訳『理性と実存』、理想社)

Jaspers1947 : Jaspers,K.,*Von der Wahrheit*,Neuauflage,Piper, München. (林田新二他訳『真理について』、理想社)

Jaspers1948 : Jaspers,K.,*Der philosophische Glaube*,Neuauflage, Piper,München. (林田新二監訳『哲学的信仰』、理想社)

Jaspers1962 : Jaspers,K.,*Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung*, Piper, München. (重田英世訳『啓示に面しての哲学的信仰』、創文社)

### 註

(1) 金子武蔵氏は、実存を「今—ここにおけるこの自己」としているが、同時に「物事のもとに真実に現在すること」が実存が人間を実存せしめるとしている（『実存理性の哲学』、1953年、弘文堂）。実存 *Existenz* 元来の意味は、中世の *existentia* であり、それは本質 *essentia* から「外に出た存在」である。従って、現実のもとにあること、という意味が実存にはある。そして、実存が直面する現実とは、普遍的概念によって捉えられ、代替可能な局所的・制限的な現実ではなく、「今—ここにある物事の代替されない絶対的現実」であるはずである。

(2) 吉村文男『ヤスパース 人間存在の哲学』（春風社、2011年）、499頁参照。